

海を越えた友情

鳥取県・江原道友好交流20年

中 民間交流

歴史認識問題などで日韓関係が冷え込む中、民間交流は途絶えることなく、友好の輪を広げている。

ともに歩く

倉吉市のNPO法人未来(岸田寛昭理事長は、韓国の国際ウオーキング大会組織委員会(李康玉理事長)と協約を結び、2005年から毎年、歩くことをテーマに相互交流を進めている。

同年に鳥根県が竹島の日条例を制定し日韓の対立が激化した、両団体は話し合いの末に「同じ未来を見ながら歩くこと」で認識も近づくと考

政治情勢に左右されず、幅広い年齢層が参加してきた。韓国・平昌

裾野広がる

民間交流を後押ししている鳥取県国際交流財団

地域経済活性化の力に



韓国・原州市で毎年行われるウオーキング大会に参加し、交流を深めるNPO法人未来のメンバーや一般県民の参加者ら=写真は2010年10月の大会

は、渡航などの経費に補助金を出している。県と話す。江原道の交流20年となる本年度は助成要件を緩和と、県と江原道の民間交流は20事業ある。スポー

65%が韓国との交流だ。岩本由美子事務局次長は「行政同士に難題があっても、交流で芽生えた喜びや悲しみを共有する気持ちは歯止めになる」と話す。江原道の交流20年となる本年度は助成要件を緩和と、県と江原道の民間交流は20事業ある。スポー

加茂中3年の清川朋紀君(14)「米子市両三柳」は11年夏、2泊3日で韓国の家庭を訪ねた。身ぶりでも分かり合い「すぐに親しめた」という。母の奈緒美さん(46)は「大人になって世界の国と関わるとき、この経験が生きてくる」と目を細める。

同親善協会は物的交流にも力を入れる。日韓の企業を集めた商談会を開き、今年には江原道のキムチが県西部の小売店に並ぶという成功事例が生まれた。

しかし、食品添加物をめぐる国基準の違いや輸送料金の負担増など課題は多い。岩崎光春会長は「物的にはまだ国境の壁が厚い。それでも挑戦が大切。交流を地域経済の活性化のエネルギーにしていきたい」と話す。

同じ未来を見詰め